

條引陶注云、蘆菔是今溫菘、其根可食、葉不中敵、蕪菁根乃細於溫菘而葉似菘、好食、萊菔條引唐本、注云、陶謂溫菘是也、又引爾雅云、葵蘆菔、釋曰、紫花菘也、俗呼溫菘、似蕪菁、大根、一名葵、俗呼雹葵、一名蘆菔、今謂之蘿蔔是也、則知溫菘卽蘆菔、本草和名載本草萊菔、訓於保禰、又別引崔禹出溫菘、不載和名、源君蘆菔依輔仁訓於保禰、溫菘別訓古保禰、分爲二物、恐非是、貝原氏曰、西國有古於保禰小於波多野大根、生野圃、根不突出地上、其子落自生、不假人力、是救荒本草野蘿蔔也、救荒本草云、生平陸匪蔓菁若蘆菔、求之不難、烹易熟、飢來獲之、勝梁肉、今本不載、按古於保禰、源君所謂古保禰蓋是也、郭璞注爾雅、薑蓄云、大葉白華、根如指、正白可啖者、可以充之、鄭玄詩箋所云、蔓菁與蓄之類之蓄是也、然爾雅蓄當別是一種、本草所謂旋花卽是、郭璞因其名同、以蔓菁類之蓄注旋花之蓄者誤、又救荒本草云、水蘿蔔生田野下溼地中、苗初揚地生、葉似蕪菜形而厚大、鋸齒尖花葉又似水芥菜亦厚大、後分莖叉、稍間開淡黃花結小角兒、根如白菜根而大、味甘辣、蓋是蓄之今名也、

〔類聚名義抄八〕〔神〕菘〔正音終〕〔ホ子〕

〔古今要覽稿 菜蔬〕〔古〕
〔今〕
〔要〕
〔覽〕
〔稿〕
〔菜〕
〔蔬〕こほね こおほね こおほれ ふ 野蘿蔔。

こほね一名こおほね、一名弘法大根は漢名を薑、一名薑、一名蘿薑、一名野蘿薑といふ、此種は西國及び陸奥會津等の野圃のほとり、或は道傍にもおのれと生出るものにて、その莖葉すべて蘆菔に似て小さし、根もまた相似て、長さ僅に四五寸のものなりといへども、春時これを採て醃藏し食ふに、その味美なり、また家圃につくれるものもあるよし、大和本草に見えたれども、すべて江戸近き田舎にはたえて此種ある事をきかず、大和本草云、野蘿蔔、今按に西土の小大根なり、波多野大根の一類別種にて、波多野大根はこおほねより大なり、江戸に多く出づ、ともに野圃に生す、人力を用ひず、種をちて自然に生す、又圃にもつくる、二種共に脆美なり、味辛し、鹽に漬け又蒸て煮て熟し易し、救荒野譜に言ところの如し、根は地上に出ず、常の大根に異り、